Contact Zone 2019 書評リプライ

沖縄というコンタクト・ゾーンの民族／民俗誌：福田真郷氏の書評へのリプライ

越智郁乃 *

1　フィールドワークと「私」

拙著［越智 2018］は、2010 年 9 月に広島大学に提出した博士論文を基に、その後の研究成果をまとめて 2018 年 2 月に出版したものである。近年、博士号取得とともに出版する例が多くなりつつある中で、出版までの 7 年間著者が何をしていたかといえば、半分はエフォート 100％が求められる研究員や教員職に就いたため、研究に時間が割けなかった。残り半分では、学生にフィールドワークを「教える」という経験の中で、自分の過去のフィールドワークについて考える機会を得た。この「教わる」立場から「教える」立場への移行、と同時に「教える」ことを通じて「教わる」という経験をしながら、拙著を執筆したのだった。

ゆえに拙著の議論の中心は「沖縄の都市移住者と祖先祭祀」であるが、院生・学部生との対話の中で導かれた「いかなるフィールドワークを行ってきたのか、行いうるのか」という議論を輻輳させたつもりでいる。それは特に近年の大学教育で「フィールドワーク」がバズワード化する中、「そこにある課題解決のための調査」あるいは「見えないニーズを掘り起こすための調査」だけが「フィールドワーク」ではない、もっと土壌を耕すような行為としての「フィールドワーク」を求めていたのだ。

と同時に、執筆しながら院生時代を振り返っていた。著者が大学院に入った 2001 年は、日本に遅れてやってきた「ライティング・カルチャー」ショックも一段落していた。フィールドワークにおける客観性は求めるが、もはや「私」という存在がフィールドに影響を与えざるをえないことは院生レベルでも共有されていたように思う。とはいえ、実際に自分がフィールドに入ってそのことに対峙しても、単発の論文では「透明な存在」になり、「私」の存在は消えていた。出版に際し、再度各論文を読み直したときに、調査当時の現地でのやり取りや、感情をありありと思い出した。私は、この蘇ってきた過去の自分を葬るのではなく、ある種の案内人として拙著各章に様々な形で登場させることにした。いや、勝手に登場したのかもしれない。

ともかく、「はじめに」で「著者自身が墓の移動や女性による継承という問題に直面した経緯」を「告白」してみせたのは、過去の「私」の一部であり、その「私」がフィール

*OCHI Ikuno　立教大学観光学部　ochiiku@rikkyo.ac.jp

ドで沖縄の祖先祭祀の現実に直面し、似たような悩みを抱える人々と話し合ううちに、研究が深まった過程を示している。

2　沖縄というコンタクト・ゾーンにおける祖先祭祀の行方

沖縄というコンタクト・ゾーンの特徴は、不均衡、かつ重層的な権力構造の下で、日本の経済やあらゆる制度に組み込まれていることだ。ゆえに、拙著における「都市移住者」とは本島中南部の都市圏に暮らしつつも、「本土日本」（あるいは「内地」）との絶えざる交渉の中にいる人を意味する。大学進学、就職から、果ては墓苑業者選定にいたるまで、ライフイベントに「本土日本」は密接に関わる。転勤という形で不意に祭祀継承者やその家族が本土に引っ越すこともあるだろうし、上位世代もその可能性を考えている。

拙著で取り上げた、次世代が女子のみの家の墓移動の例では、継承者である長男が、娘たちが本土や国外の男性と結婚した場合、これまでの祭祀における継承論理が適用されなくなる可能性を予見していた［越智 2018:135］。そこでその移動が予見を超えた実例として、沖縄から福岡への移動例を取り上げた［越智 2018：136,192］。拙著では詳述しなかったが、この例では祭祀すべてが変化してしまうのではなく、長女が沖縄仏壇を転居先に持っていき、これまで通りの期日に祭祀を執行し、お重にごちそうを詰めて墓に供えている。また、両親は転居した後も、冬は暖かな沖縄で過ごすため次女の家で生活していた。このように女子が継承を果たしつつも、沖縄の親族や知人との縁を持ち続けているという本事例を見ると、離島から沖縄本島への移動の方が、ハードルが高いのではないかとすら思う。もちろん今後の世代が福岡における祭祀をいかに引き継ぐかは課題であろう。しかし、沖縄全体でも同じ課題を抱えている。この移動状況こそ沖縄というコンタクト・ゾーンの姿であり、県内の移動例のみに集約してしまうのは一見分かりやすい例示であっても、生活と祖先祭祀の有り様を切り縮めてしまうと考えた 1。

また、移動例を県内に限定すると、「本土日本：沖縄」「仏教：沖縄在来宗教」という単純な構図に陥ってしまう。近年沖縄における葬式で一般化してきた僧侶による葬儀の執行や業者の利用については、先行研究でも「本土化」と指摘されてきた。しかし、そもそも本土における葬儀が多様な状況の中で、「本土日本」を単純な比較対象にすべきではない。また、窪徳忠らが「外来宗教」という言葉を用いて沖縄の祭祀における様々な「宗教」の混釈性を明らかにしたように、仏教は沖縄における祭祀から一切排されてきたわけではない［窪 編 1978］。13 世紀の沖縄に伝来した仏教は信仰として根付かなかったにせよ、祭祀の随所にその影響がみられる。年忌の数え方などはその典型例であろう。そのベースがあるからこそ、現在本土日本の業者が多数介在しうるのではないだろうか。

上記を踏まえて今後課題になるのが、「墓じまい」や「散骨」である。私が集中的に調査を行っていた 2000 年代前半にはまだ「墓じまい」という言葉はなく、散骨事例も「本土の人間が勝手に行うこと」あるいは「沖縄戦の最中に亡くなったため遺骨を拾えなかっ

1 この観点から、拙著の先行研究として移民の祖先祭祀の変化について盛り込むべきであったと考える。

た家族に申し訳ないので、自分は納骨せず撒いてくれ」と遺言した例を聞くに留まっていた。

また拙著では、「あのような大きな墓をなぜ・どうやって動かすのか」という疑問から出発した。本土日本における納骨堂利用や散骨の例は徐々に増えつつあったが、それでもなお「墓へのこだわり」を持つ人々にこだわった。そのため当時の「先進事例」ではなく、墓の移動の間に寺の納骨堂に遺骨を預けた例を取り上げたが、そこに長く放置された遺骨は適切に祀られていない例とみなされていた［越智 2018：193］。それこそが、移動先で納骨堂を利用することができるにも関わらず墓を新たに作った理由であろう。

それが現在、沖縄のテレビ CM にまで「墓じまい」が登場するようになったことは驚きである。私が取り上げた事例も、15 年違えば納骨堂を選択していたかもしれない。いずれにせよ、「墓じまい」や「散骨」にみる祖先祭祀の論理の変化については、現在調査を行っているので、別稿で論じたい。

3　墓というモノのエージェンシー

初出一覧では、著者が墓のエージェンシーについて議論した痕跡を見出すことができる。実は、博士論文を書き上げてから、一つの課題として取り組んできた。

アルフレッド・ジェル［Gell 1998］は、西洋由来の美術制度や審美体系によらず、作品は反応や行為を引き起こすいわば人の行為を媒介するもの（agency）であると捉えた。社会的なエージェント（agent）たる作品が、制作者である人の行為を拡張し媒介することで、作品の周辺には複雑なネットワークが生まれる。芸術や芸術作品を通じてつながる人の社会関係こそ、芸術や芸術作品を成り立たせるために重要である。それに対してティム・インゴルド［2017（2013）］は、結果や対象として作品をみるのではなく、生産の過程における創造性が重要だと指摘する。制作を始点に作品が「もの」として成長・生成する過程で、作り手たる実践者の身体の運動感覚 ＝「生」の動きと世界との correspondence（応答・対応・調和）を重視すべきだと指摘する。この対立する両者の議論は、いずれも作品を墓と読み替えると墓と人との関係、あるいは遺骨と遺族との関係に当てはまると考えて検討を進めてきた。

しかし、出版草稿の評者の一人から、「この議論を使わなくても説明できるのではないか」と指摘された。これまでの研究において、墓地風水の研究だけでなく、「墓はあの世の家である」ことや、墓自体への年忌祭祀によって墓に人格が与えられていることも指摘されている。ゆえに、もともと単なるモノではない墓とモノとしてみられていた作品を同列に扱えない、エージェンシーの議論を持ち出すまでもないと指摘された。これには少々落胆したが、エージェンシーの議論を枠組みにした事例の検討が深まっていなかったのだと反省して、再度、従来の祖先祭祀の議論に立ち返ったのが拙著である。

墓のエージェンシーに関しては「墓じまい」や「散骨」事例を含めて再度対峙すべき課題である。評者から改めて有益な示唆を得たこと、そしてなにより執筆にあたりに私の力となった学生らと同じ院生から書評いただいたのは著者として望外の喜びである。今後も

研究に精進したい。

＜参照文献＞

Gell, Alfred 1998 *Art and Agency : An Anthropological Theory.* Oxford University Press.
インゴルド、ティム　2017 『メイキング 人類学・考古学・芸術・建築』金子遊・水野友美子・小林耕二訳、左右社。
窪徳忠編　1978 『沖縄の外来宗教　その受容と変容』弘文堂。
越智郁乃　2018 『動く墓――沖縄の都市移住者と祖先祭祀』森話社。

越智郁乃　2018 『動く墓――沖縄の都市移住者と祖先祭祀』森話社。
窪徳忠編　1978 『沖縄の外来宗教　その受容と変容』弘文堂。
インゴルド、ティム　2017 『メイキング 人類学・考古学・芸術・建築』金子遊・水野友美子・小林耕二訳、左右社。
Gell, Alfred 1998 *Art and Agency : An Anthropological Theory.* Oxford University Press.